

地域包括ケアシステムに看護職はいかに貢献すべきか——。栃木県看護協会の渡邊カヨ子会長は2016年の就任早々、この課題に対応しようと、地区支部活動の再構築に乗り出した。

地区支部の在り方を再構築

渡邊会長が地区支部活動に関して見出した課題は、看護協会の動向が周知されていなかったり、地域包括ケアの理解と進捗に差があることなど。これに対し、次々と策を講じていった。

例えば、従来は別々の人物が就いていた地区理事と地区支部長を兼務にした。併せて、地区支部役員に看護管理者や行政保健師の就任を促した。県看護協会との一体性を重視するとともに、自治体行政との連携や物事を見渡す能力を期待してのことだ。

また、協働の相手となる他職種・機関との窓口を地区支部に任せた。以前は、県看護協会が依頼を受けることもあったが、地区支部区域内



のことは地区支部が担い、地域で存在感を発揮できるようにと考えた。

これら

に伴う負担増を考慮し、県看護協会の役員が担当の地区支部を持ち、サポートする体制も敷いた。「結果はこれから」と語る渡邊会長だが、すでに手応えを感じている様子だ。

実は、渡邊会長の就任以前から、県看護協会は看看連携の必要性を強調し、地区支部では看護管理者同士の会議の場を設けるなどの動きが始まっていた。日本看護協会の「看護職連携構築モデル事業」も、2015～17年度の3カ年にわたり、3地区支部が受託してきた。

活動を通じて増した存在感

16年度のモデル事業に参加した県東地区支部も、受託前の15年秋から病院・診療所の看護管理者と行政保健師で「看護職代表者懇話会」をスタートさせていた。

こうした活動では、行政保健師の参加が鍵となるが、医療施設が少ないために行政保健師が地区支部役員になるという慣例が功を奏した。役員を務める保健師の呼び掛けで、支部区域内1市4町の行政や地域包括支援センターの保健師がそろった。

一方、病院・診療所への声掛けは、地区理事兼地区支部長の河原美智子さん（芳賀赤十字病院看護部長）が中心になって行った。交流が乏しい診療所へは説明に赴き、看護協会の会員がない施設にも「地域の連携体制を作るため」と参加を求めた。

懇話会は、15・16年度とも年3回開催。連携の輪を広げようという声を受け、昨年12月からは、訪問看護ステーションや介護施設の

看護管理者、ケアマネジャーも加わった。

こうして広がったメンバーで作り上げたのが「看護職連携マップ」だ。地区支部区域内の病院、有床診療所、訪問看護ステーションの情報を掲載する。工夫したのは、各施設・事業所の受付窓口



となる連絡先や担当者を明記したことだ。誰に連絡すれば良いのか分からないという声に応えた。認定看護師の所属情報も載せ、その専門性を地域の資源として生かせればと考えた。

本年度も活動は盛んだ。8月の懇話会は、十分議論したいとワールドカフェを試みた。「訪問看護師との視点の違いを認識した。病院でも退院後を考えて看護していかなければ」と河原さん。7月からは、地域の医師会・歯科医師会・薬剤師会との代表者会議に参加するようになった。地区支部の存在感が増している現れた。

渡邊会長は「ブランドデザインの立案は、県看護協会の役目。地区の活動は地区支部の役目。両者のベクトルが合うことが大事」と語り、両者の連携強化を進める。17年度のモデル事業には宇都宮地区支部が参加するほか、全地区支部で取り組みが活性化しつつある。

◀写真：8月の懇親会。ワールドカフェ形式で事例を基に活発な意見交換をすることができた
▲図：「看護職連携マップ」は地域の医療・介護職、ケアマネジャー、社会福祉士らに好評だ